

# 仮想通貨を考える

最近仮想通貨が話題になっていいます。仮想通貨取引所からNEMと言う仮想通貨が580億円も流失したといいますが。その前の2014年には代表的な仮想通貨であるビットコインがマウントゴックスという取引所から100億円以上無くなり、この会社は破たんしました。ビットコインは知っていましたが、NEMなどは初耳だし、まだたくさん仮想通貨があるらしいのです。そもそも仮想通貨とはなんでしょう。よく解っていないのは私だけではないでしょう。

インターネットを見ると様々な解説があります。テレビでも池上彰さんが解説していました。それを聞いてもよく解りません。いろいろな解説の中で私が一番納得したのは「子供がままごとで使うおもちゃのお金のようなものだ」との説です。子供の世界では様々なものが流行るものです。私の経験ではオハジキであつ

たり、メンコであつたり、ピン牛乳のフタという事もありました。これなどは一番通貨らしいものでした。飲んだビンのフタを乾かして大量に持っている子がいました。それで遊んだり、交換もできます。そもそもこのマウントゴックスという会社はトレーディングカードというゲームなどに使うカードの交換所としてスタートしたそうです。だから「おもちゃのお金説」は意外と本質をついているかもしれません。

昔は貝をお金として使っていたので、貨幣の「貨」は貝が付くのだそうです。これは宝貝と言う貝です。本多勝一の「ニューギニア高地人」という本に、ニューギニア高地の隔離した環境に暮らす民族がまだ貝を通貨として使っている事が書かれています。1964年に実際に筆者がここで、現地の人と生活を共にした記録です。ここには部族はあつても

政府も中央銀行もないので政府保証はありません。しかし人々はこれに価値があることを疑ってはいません。面白いことには、本多たちが日本から持ち込んだ宝貝は評価されなかったという事です。現地で流通している貝は長年使い古され、模様も擦り切れていたそうですが、ピカピカの新品宝貝よりも信用があつたそうです。

仮想通貨に対して法定通貨というものがあります。円とかドルとかユーロなど、各国が法律で保証しているものです。国の保証があるのかないのかが大きな違いと言われています。しかしここで言う国の保証とはなんでしょう。それは1円の、1ドルの、1ユーロの価値を保証しているにすぎません。1円は1円として使えますよ。ということですが、ここで間違つてはいけない事は、

106円は1ドルとして使えますという事は誰も保証していないということです。100円で缶コーヒーが買えますという事は保障されてはいません。

「なんだ、それではどっちでも同じじゃないか」と言いたくなるでしょう。過去の歴史を見れば、国の保証した通貨は何回も紙くずになっています。国と言うものはいろいろ理屈をつけて、経済的合理性に反する事を平気でやるからです。国を守るため、国民の福祉の為、景気回復の為、紙幣を印刷します。これに対して仮想通貨は保証がないため、変なことをすれば誰も使いません。しかも発行上限があるのです。

代表的な自由主義の経済学者であるハイエクは中央銀行の紙幣発行を否定し、

自由化を主張しています。いわば仮想通貨の先駆的思想家です。

現在仮想通貨の価格が高騰しているのは、投機目的と言われています。私はむしろ資産保有、法定通貨に対する不信からのリスク分散という意味を考えます。円やドル、ユーロ、ポンド、元の先行きに対する不安感です。ましてやもっと小さな国の通貨はもろんの事です。世界の主要国が政府所有の印刷機をフル回転させマネーを生み出しているのです。まさに富を生む「打出の小槌」ですが本当に大丈夫でしょうか。誰しも心配にはなると思います。

代表的な貨幣理論である「貨幣商品説」では商品が貨幣になると言っています。でもいまは反対に貨幣が商品になっています。その結果小国の発行する通貨は大国の通貨にすり潰され、価値を失っています。つまり貨幣の下落、物価の高騰、インフレです。世界で通貨のない主権国家はありません。通貨がなければ独自の経済政策が打てないからです。通貨がすり潰されるといふ事は国家がすり潰されるといふ事なのです。

従来の経済学の常識で言えば、貨幣は

国民経済に対して中立的であり、貨幣の増量は物価の高騰を生み国富の増大にはならないという事でした。しかしグローバル経済の下では、貨幣は商品として他の弱小貨幣を押しつけて世界を駆け回ります。つまり結果としてインフレの輸出です。そして主要国は膨大な通貨発行益を手に入れます。おそらく仮想通貨の登場は、そのような世界経済の変化のなかで生まれてきています。

1971年アメリカのニクソン大統領は、金とドルの兌換停止を宣言しました。それまでは世界の通貨はこのアメリカドルに固定相場で連動して最終的に金に繋がっていたのです。いわゆるブレトン・ウッズ体制です。この時から各国通貨は金とのつながりが絶たれ、商品の一つになったのです。その意味では仮想通貨の登場は予想された事でした。元々おもちゃだった通貨がまたおもちゃに戻つたという事です。

今後仮想通貨には様々な波乱があると思います。システムが安定するまでには時間が掛かるでしょう。しかし法定通貨との競争で、仮想通貨に軍配が上がる日がいつか来るように、私は思います。

代表取締役社長

鈴木英介

